

牧師室から (2023.7.23)

海の日に、高校時代のクラスメイト数名と会った。コロナ禍が続いたということもあって、久しぶりの対面であった。今まで卒業後でも年に1回くらいは会っていたので、このメンバーがおおよそどのような経過をたどってきたかはある程度分かる。

以前石巻にいた時、ある年配の長老が、同窓会に行くと当時の自分に戻った気がする、と言われたことを思い出した。確かに、私も高校時代のクラスメイトと会うと、今の自分というよりは、当時の人間関係における自分が現れてくるような気がする。人は一つの人格というよりも、自分の内にいくつかの人格があり、それが関係する人によって違う人格が出て来るのではないかと思った。勿論人は年を重ねればそれなりに変わることもあるであろう。それでも基本的に変わらない自分がある。「私」というのは他者との関係において規定される場所があるのではないか。自ら自分自身を見つけようとしてもそれはできないのではないか。他者における「私」の総合が、所謂自分であると言えるのではないかと思った。それは自分で自分自身の顔を見ることができず、鏡に映った自身の顔しか見ることができないのと似ている。私たち人間は私たちの造り主であり、他者である神様の前に立っているときこそ、本当の、本来の自分を知ることができるのだ。

とにかく彼らと会って昔の自分の一面を垣間見た気がした。

「古くからの友人をなおざりにするな。彼は、新しい友人に、はるかにまさる。新しい友は、新しいぶどう酒。古くなるほど、味わい深く飲めるのだ。」(シラ書9：10)

(鈴木淳一牧師)